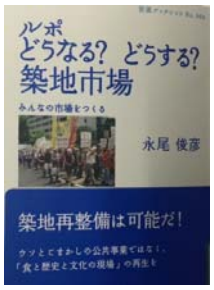
# ルポ どうなる？どうする？築地市場

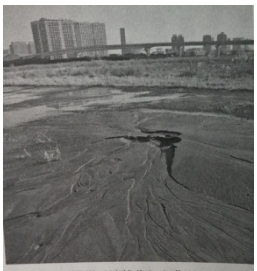



標題はルポライター永尾俊彦著「岩波ブックレット」2017 年 7 月。『干潟の民主主義－三番瀬、吉野川、そして諫早』『国家と石綿－ルポ・アスベスト被害者「息ほしき人々」の闘い』など、永尾氏の多くのルポを読んできた。今回もまた、引き込まれながら一気に読みすすんだ。

築地市場と豊洲新市場の位置関係

目次から―プロローグ 仲卸の絶望　第 1 章 臨海破綻のツケ回し 第 2 章 「無関心」という石原知事の重罪　第 3 章 盛土はなぜ消えたか 第 4 章 あきらめなかった人々　エピローグ みんなの市場 築地市場の豊洲移転問題関連年表

本書から新たに知ったことも多い。その一部だけでも紹介したい。― 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起きた。地震と巨大津波で全電源喪失状態に陥った福島第一原発が 12 日に爆発した。わたしは豊洲の新市場予定地がどうなったか気になり、13 日に現場に行ってみた。あたりは一面にクレーターのような穴がいくつもあいており、そこから砂と地下水が流出していた。地下水は砂の上に糸を引くように無数の筋をつけていた。


東日本大震災で液状化した豊洲新市場予定地（2011 年 3 月 13 日）

都は、これを当初は液状化ではなく、地中の砂が吹き出る「噴砂」だとして、「噴砂は 108 カ所で確認された」と発表した。だが、その後液状化と認めた。15 歳から 60 年以上築地で働く仲卸の野末誠さんはこういう。「豊洲市場ができた後に地震で液状化し、地下の有害物質が噴出して『豊洲市場食品汚染事故』が報道されるようなことが起きて、今回の原発事故のように『想定外』の一言ですまされたらね、わたしは死んでも死にきれません」

東京ガス豊洲工場 1964 年頃（『東京瓦斯豊洲工場 20 年のあゆみ』）

しかし、都は豊洲の液状化を見て移転を再考するのではなく、こう開き直った。「液状化対策をしていない埋め立て地では液状化は発生して当然。だからこそ、液状化対策を確実に行うことが大切です」石原知事も、「先端技術を活用し、安全・安心の確保は十分可能」と、2011 年の四選後も豊洲移転に固執した。‥‥　日々生ものを扱い、肌感覚で食の安全をとらえている仲卸と机上の理屈で理解している知事や学者との違いだ。

表紙下から―ウソとごまかしの公共事業ではなく、「食と歴史と文化の現場」の再生を。築地再整備は可能だ。

（2017 年 8 月 19 日）